

岡本勘造綴



へ14
2689
9

金松夢
文彦

夢

花の
秋風
吹きぬ



へ14
2689
8

三編中

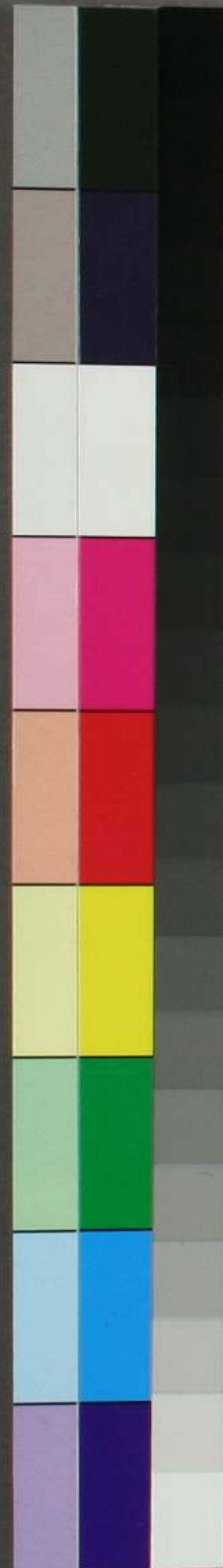
芳川俊雄閣



へ14
2689
7

島孟齋書

三編上





芳川俊雄関

島孟齋畫

三編上

へ14
2689
7



芳川俊雄 岡本勘造 綴

夜山嵐

阿鬼怒心

化通

婀娜夢

三編上之巻

永島孟齋画

金松堂壽梓



妖術魔法の妄誕へ米國船着港の蹄砲を打拂は幽霊怪物の虚説へ扱へ神
經病でつらつと十と木頭小千ヨシとちをりぬ柳々種官小説といへ漢土の三大
奇書へ更ちより皇國の名著珍作のつと法術遺技幽霊説のドロンとくと
現つねねらへ因て以て看客も亦面白の評と下せしが今や箱根の關も開
け世の中加ふる怪談を説きよめし秘と前編に阿八重が亡魂らへ糸のめと
か目ようはしは是ぞ神經病の何とと童男女も會得せんとの方便一才
ととみと持とせし元來の物語へ只二三輩の男女が事蹟をのりし
修の記せる全部五編の束縛冊子よく目先の爽つた趣向もあらはれど
嗚呼のまら秘本だと我さへ思つり然るも次編の出版を促して
御覽をなさるお方のある全く權十郎丈が愛顧の拍餘り頂戴針箱烟草
盆三編終つて先服と吹出た烟は輪をわめるも例の作者が口癖にあり

明治十一年九月

岡本勘造題





夜嵐三ノ上



明治元年五月十五日
上野の戦争に遭て毒
婦於夜時其家と失ふ

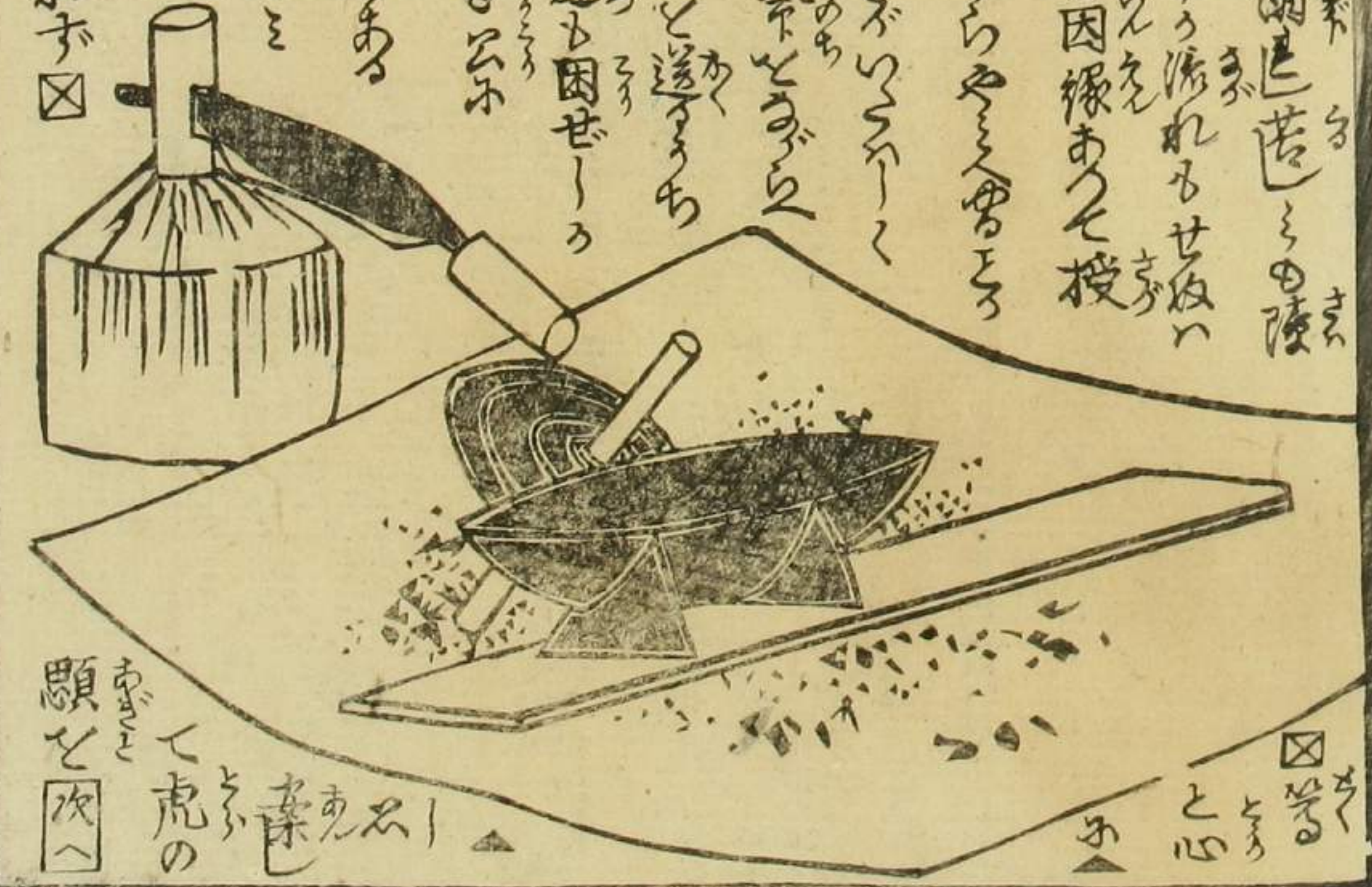
夜嵐三ノ上

彰義隊
三崎勇次郎



○散あぬ花とさむむ蜘蛛のいとも怒然の
 か八重の身の上かきぬのうめおむの結も絶
 るんと世に危あき延と助けはしむひと
 思ひ外の不幸みく日々女達お口修
 苦し死胎へ死地む瘵お今身休も
 瘦衰へ生疾へもあぬ身へ事そ
 世家と挽出て瀬川へると沈まん
 思つと常ふ去遠がばも油引せぬ
 のまゝ一間の内へ閉こめて日のあも
 えせぬ囚獄の扱ひ跡りといひ
 るまのほは梁お断をたふすと
 女以とも幾分そまを揺下も
 後の見の是まを強ひ妻あや

○水お瀬は流るるも陸
 らぬ事う流れもせぬ
 ろくの因縁ありて授
 りを聞らるるも
 と只そまのまの
 惜らぬあぬ命とま
 あぢらぬまの日と送る
 さるるの去遠も困せ
 松井の邸へせぬ
 あれといふの
 事とま知れど否
 る如何多事
 目おあやもあれ



願と次へ
 虎の
 素
 心



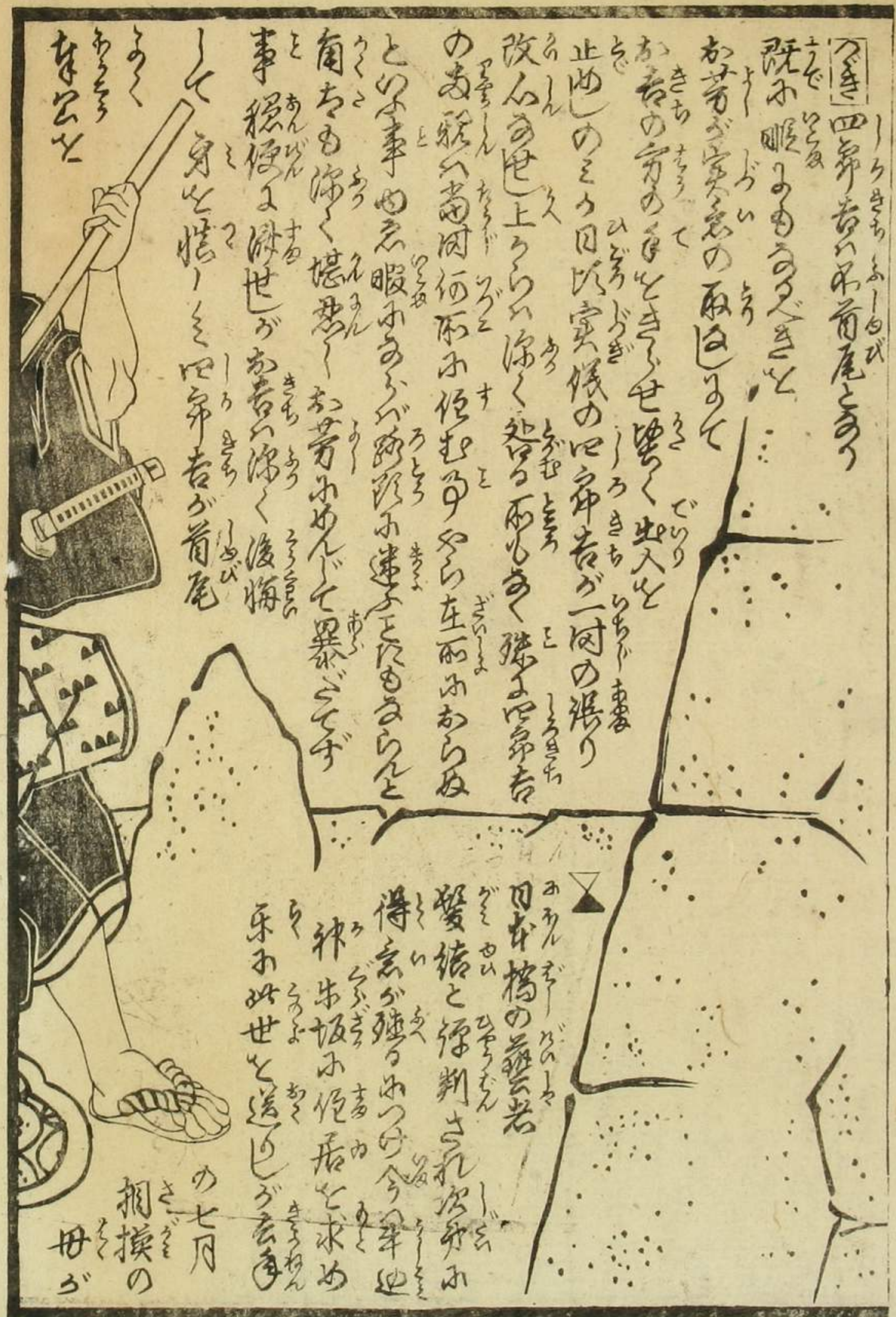
逃げててどおしお承知とせしむ善いおげと女達かたが
 裏に哀ふふ沈むか八重の花びと夢り果て面相も去幸の
 七月程が谷在の山中でちりちり出合て小梅の
 伯母のお芳へ頼んでおつと松坂屋のお嬢さぬ
 招くやお若くごころます
 貴嬢いごじりば家おと
 ひそんとせしと
 おんやいそん
 たりまで
 い何も
 い必りばもにと
 ちとあつて目取

むじかれとけぬきの
 上とつくとどろろ并の
 おのびまぬぬととろろ
 モシオ嬢いお嬢梅でもお
 ございばら
 このまや
 のつり
 かつと
 同れ
 ておん
 いそと
 りんれか
 同



はまと都すのハ
 命長あうねど
 お若のそと心あははも
 善知ぬ竹サアを嬢お嬢と
 とみすた様より清一と都も
 近お心借り出は場来るらも
 都の一曲「お嬢の奴を
 今の夏おひ用ゆるはねと
 ちりゆの久物中渡の玉じけ
 向お後お若うねと写を
 さ又水橋お若お八重の
 善知ぬとろじあつちも不
 審故「梳どんの御色髪」

又
 善世
 恨留の
 意ゆ
 ら現
 と振
 田光
 ちりゆ
 んと
 色に



四弟の首尾とあり
 既に暇のゆるぎと
 お前が実意の取返し
 お前の方の身をきき世に
 止めぬのう日次第の
 改めぬ世に上りし
 のあはれ高岡何れ
 との心事の暇あ
 南ちもゆるぐ
 事程便に
 して身を惜し
 な公と

日本橋の
 得たか強
 神中坂
 床お此世と
 の七月
 相換の
 母が



勤めあげ
 世の稼業
 として操
 おとせ合
 玉座へも
 んと決し
 愛あど由
 ありのば
 よく取上
 やめ或る
 好とそれ
 左の女醫
 愛敬人の

病を
 路程が
 りの昔
 連なる
 後けし
 おとす

薬店の医者の家ゆてお八を小出あひ妻しき
 海へかりねと深き損子のあつ事と痛くんと
 若くむか若く優しき振舞いふはにめ事
 又因縁のあることなり
 ○却て

田口夫婦

過す疾おのが心
 知らひのありとい
 はし小病晴き夜
 小たきむお八を
 の亡天といんる
 よりの角
 ちと体



彼勇
 一石八招
 ぎ折南
 光序の背
 ちと体
 せ引返
 男の心
 中
 せ引返

病をさるたび小室婦しとく
 のそ角をち以次はあかり
 何や疎くさるさぬお八をが
 怨のさる業と初めのあつお八が
 折々外小病病一疲きて為る
 病病の出来し事とんづき人を
 ねんで探りし経をうらぬ沙茶の度小
 路あて探判ある小久といへる藝妓と深く
 病病を結ひしと同ておきぬお八はくはまて
 幾層の苦惱してををを遂てるも小久も
 後りゆく男の心もはほたれどお八のせ
 たじとむ小久の心懐らくとえより嫉妬の深き身
 修羅の燈を押しへるもさるさる小久といへ



二入り倍久と外小
 お業も出ぬより
 さんとお小疾と
 角老のぬ
 是とあつ内と
 外を放蕩
 も小久と
 ちのめ
 在業
 何と
 ちま
 へ次





花の 秋風
松まね

三編中

14
2689
8

金くねの妹お連
こころのせんとを場と

つらみ

女

達と老女

いそこと白服で
因は去連を八重の
身の上の事いふ人ぐいさうと
は等て様く遊んであるやうな
かどあうー
たのぢあうー
何れも
を



いさへ来たせとや

取て五あう

あうの去連

兄より後別ゆ

泣不存子

手で必り

愛と初

きやうあう

おんをを侍ひ

出をぬく新元

送て去連

えんごとの

いし

達と老女

さぬ中う張

とさこれよと声の

下うらぶくと

あふの如子

まあうい

はと云

達と取ま

さぬお敬

お八きと老女

結めて高たつねとあれい



老女

井

縁

とせめん

もの

この水の

池

つ



ついでにさういふおきめをわがあしからしむ事と
 して若女が知るといふは身の上も悪く
 らばおれせん由りいふてさういふ事
 せしめし何様か物と見えさういふ事
 せしめし何様か物と見えさういふ事
 せしめし何様か物と見えさういふ事
 せしめし何様か物と見えさういふ事

一札と
 呉儀
 へさ
 ぬと
 呉儀
 へさ
 ぬと



例へて引去らせ上様
 ありて声と怒らしヤオレ
 去達酒々今日
 連「お八重の
 事不付ていふ個
 へさ次身もあれど
 家の名帯も出る
 され其の程使
 計らひんが上
 お八重を商家へ田口何某

さういふ事
 ひきとれ
 引取と棄
 せしめし
 根をさす
 法よ去達つ
 あつてさうい
 ぬ仰せらる
 のいり備り
 せよさうい
 由同候のお
 と、生候引
 て二十五
 ありの事次

〇海くちまう、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、



朝鮮
官許 牛肉丸
 大包代二十五枚
 中包代十二枚五厘
 小包代六枚三厘五毛

官許 天恭丸
 たんせきこの茶
 錫入一包代六枚二厘五毛

此丸、男女、老若、皆宜、其功、神速、誠、補、血、之、聖、藥、也、凡、患、貧、血、萎、縮、之、症、服、之、立、見、奇、效、誠、為、濟、世、之、良、藥、也、

文
 地本 錦繪 問屋

出版者 岡本勘造
 第一分店 三小區 横山町三丁目二番地
 出版人 辻岡文助

出版者 岡本勘造
 第一分店 三小區 横山町三丁目二番地
 出版人 辻岡文助



岡本勘造綴

夢



三編下

全書終

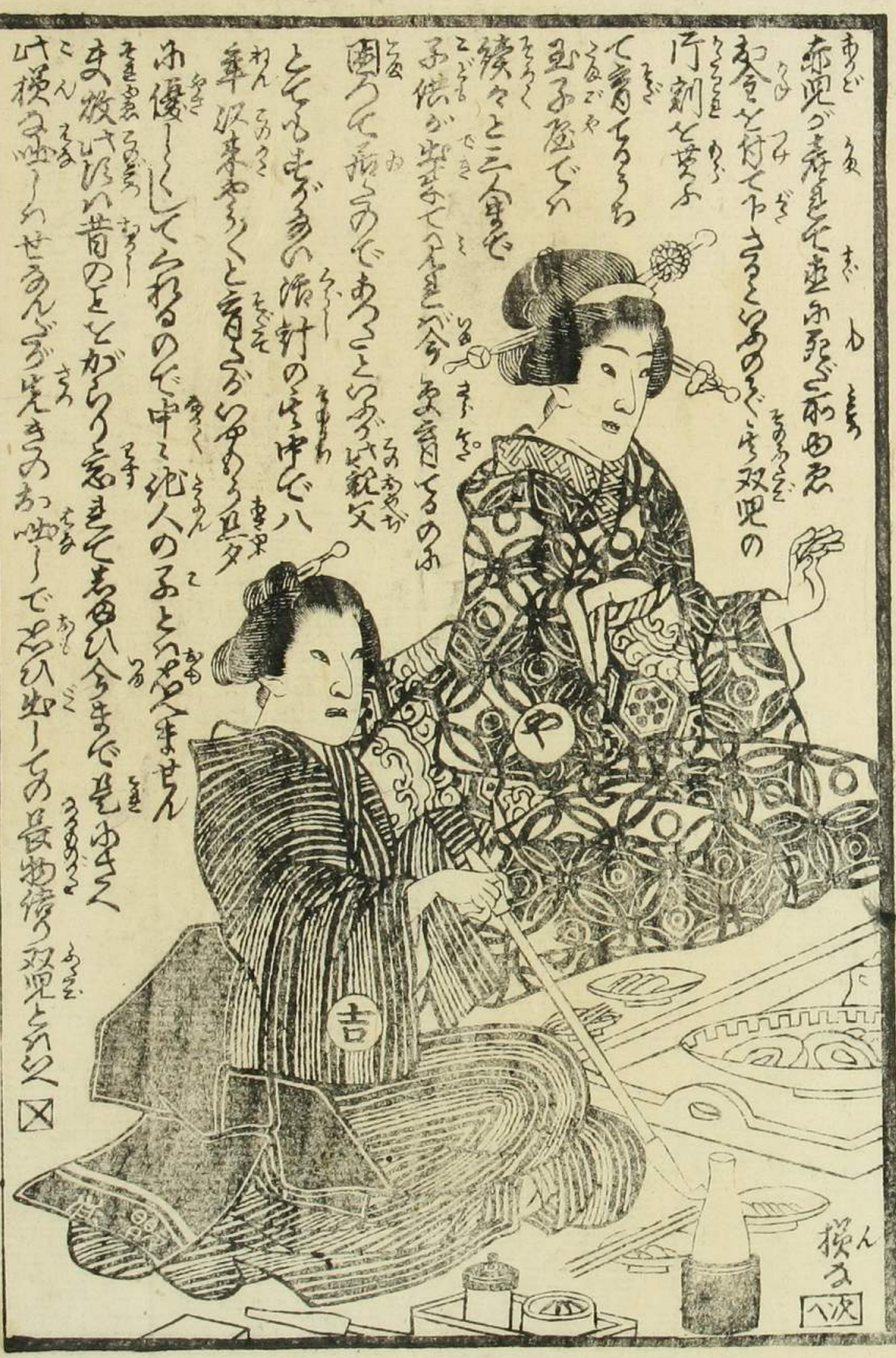
文庫

14
2689
9



入らぬ中ぐあひある男でも女でも其の心とあつての
 両ハ王子在らぬ子も其が十二さうりの女の
 子とほて事そのとほちか可きかつこの縁と
 あつてさうく其の心育てその心小くても時
 玉子屋の心一ふび見の心中橋道所の
 まつた
 女の方見が
 考れこの
 と外岡が
 とて草の上うら親あ
 すい何あ一と違てこれと
 両揚波女さんおれまねこのり玉子家でも

初めよう
 初めよう
 まいりけ
 ておそ嫌
 のさう小
 はじめに
 させ
 くら
 中あせ
 長く不仕合に
 是れおきけ



赤兎が毒を遠くたすお母
 おを付けて下さるこの心と双児の
 行刺を其の
 てさうして
 玉子をたての
 続々と二人を
 子供かおきてとまはる今まをのふ
 固く心あつてあつてこの心は親父
 とてもさうあつて作針の中心ハ
 年収来あつくとさうかんの心は夕
 小優しくしてらるの中心に人の心とあつて
 ま放けは昔の心とがりの心とあつて
 け横の心とせあんが先きの心とあつて

吉
 換
 八次



早うお世を暮らす交と云れて
 八つと毎の優しけ男の
 云々お八重のあまぐ
 婿さす始めて
 若え南
 笑釈
 女の
 愛歌
 南も今 又の極められ何れと
 あの色をけけはけられ何れと
 小久いお世勤め事の
 大男と手紙よお世供の
 丁稚とよく返し今宵の交へ

夜もまよお八重の母
 昨夜丁稚分度り
 と死持ぬりころ
 お世の子供
 何れの親も
 さつわり時
 僕も大男
 纏まつて上
 首尾ある
 ちつとわう
 小久といふ
 双児あり
 とて世業の



二つとも酒も奉りお世ま
 改め酒者もど
 願をせ今互ひ
 小難いも根もも勝
 夕月夜終るす二階の
 簾を巻あげ高政付や世業の
 事あどと唐京間さ又夏の夜のそと
 又後雨降の音お塔々竹ま体おんと
 二階即させ後雨降ら下登お小久いお
 婿の色あく南ちとお八重の今宵の首尾と
 初つてお世お世い如何よ世の目抱るうと世のほし
 珍白く世志操ぞとお世とちつめは一回お願いなる

うつて困今
 お世のま
 なるあまの
 お子さぬ
 ちつとわ
 夜も
 八やお
 さ
 と

同もろく又多小実の母
 對面の嬉しき扱へ申に拙き
 等小つれせぬ又極節者も
 不思儀と嘆きたるのめ始於
 せ二階心見固まる
 南の入りぬささ
 お八重の母遠も
 何ゆゑ面合せささ
 あらずぬ事の
 まむおも
 あらねば
 お若ふ
 りひつり

〇うけこぬおれい
 涙のしるふとも何のれが
 怒りまのせう必らげん記

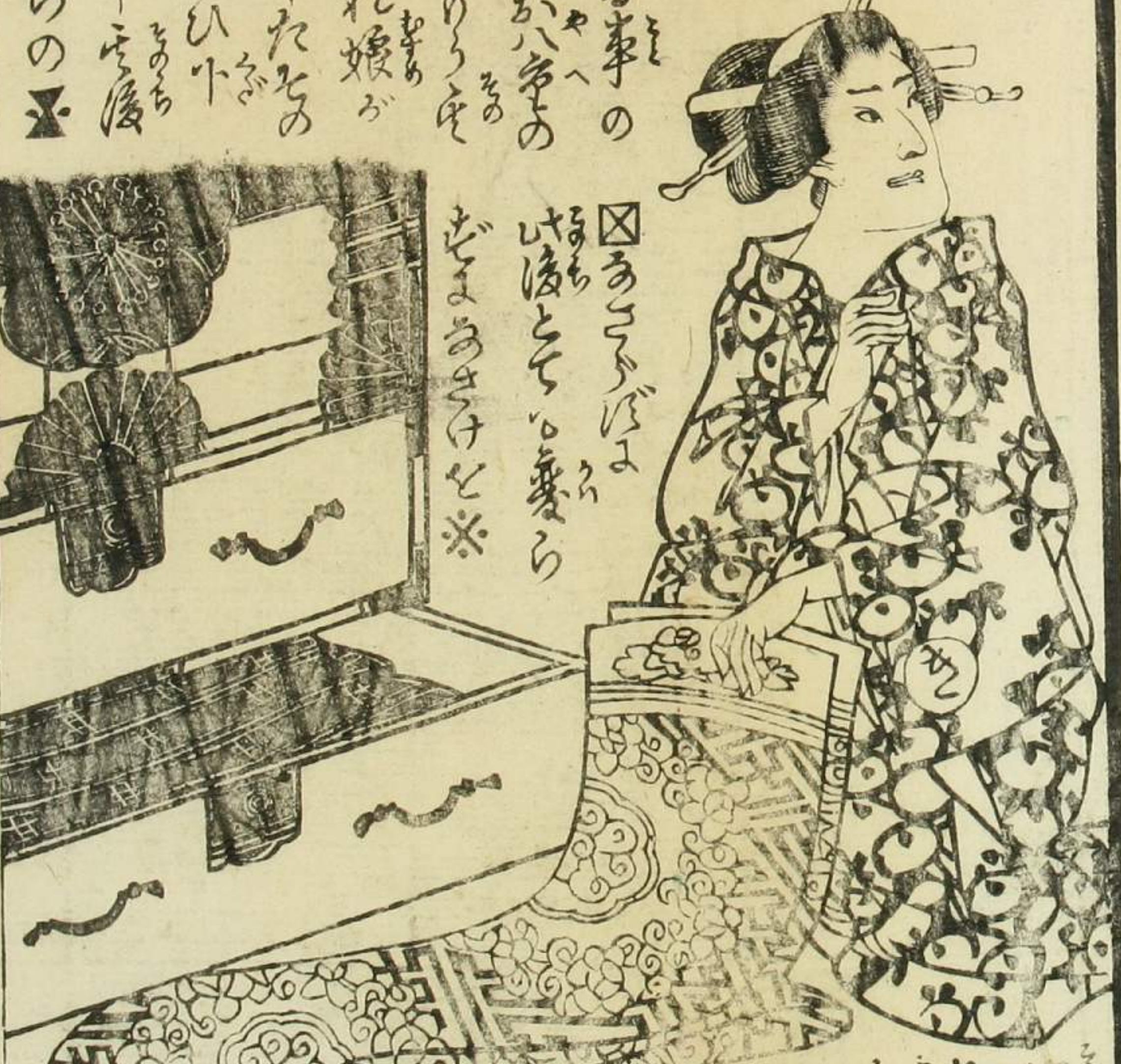
〇わけをゆつて
 下さるれり
 かまの此時をも
 せし節をカホ
 ありとて嬉し
 涙はうねり
 実もあ
 の
 〇備ふ
 せふ



お八重の母と二階へ
 呼あけ面用さひか
 名もせし不潔
 あら様でお八重と
 物たり涙を嘆きと
 母お小まをわけたる事の
 宛をよまもすてお八重の
 母の涙をうらみありあり
 事へやめて下され娘が
 宿屋で寝とてたその
 時お小まがお救ひ下
 きたるのが孫のうらみ
 せし節のお身うち

〇あこがれよ
 け後とていふ妻ら
 せよあこがれよ

〇心さす
 心さす
 南を
 少し
 せやく
 〇上
 〇上
 〇上



〇小

一丁裏田圃の字通辨へ
 昨夜の縁後さる用事
 あつて物お背さる伏ふ
 立寄られハア名も角も
 と引寄るも人あつて
 夜も通ひて遊々も
 我家へぬりし小女
 ありて申すはひの影造
 さぬいふさうさえとお供
 めして今給そや何と
 おおありしとの相又
 顔ひのワとるわ心小

紙と持せりの高つくと
 後の事をと懐じり見小首
 共小田新さる西小傾あくセツ
 道あきぬとおさる何なる
 海り来るも南を同つけ
 何所へ行くぞもホ女奴と
 例小妻り物ひ様新
 こても凄まじいばるちの換子
 下女うう家ねつと狗小あう
 汗のぬきさる単衣ぬ
 久まら何ひせく
 耳落て

尚の声を低く
 炎嬢も今夜の
 悟とあさの首尾
 縁が切さう入ら
 お金を彼人と世帯
 持ん然集も今
 事か影とて相
 暁の忙障とさ
 お拂ひ給か
 上の毒を喰
 その毒で



うるぐさ二人の形
 幸いと書みあは
 但しとあき
 外へお返して
 火事の前
 の外へお返して
 火事の前
 の外へお返して
 火事の前

酒と持てまの
 声さる底の
 二人の身
 とまら後
 同中
 あまの

〇あまの
 〇あまの
 〇あまの

芳川俊雄 岡本勘造



芳川俊雄の編輯が何と云ふも切
 接方と我らもあつた
 ござるとおまよの初め
 おまよの今もあつた
 形急場と成ては芳
 がまよの今もあつた
 てまよの今もあつた
 南方の例(おまよの例)を
 多岐にわたるおまよの例
 發と個(おまよの例)を
 運(おまよの例)を
 徳利(おまよの例)を
 毒婦の例(おまよの例)を

田島豊三郎編
 初編より
 九編迄出版
 以下追々発売
 高田業
 小学
 取引要文全
 魯文作
 國貞重
 秀賀作
 國貞重

編 鴉 郷 編輯
 銅 版 開 化 玉 編 全
 剛 化 女 用 文 章 全

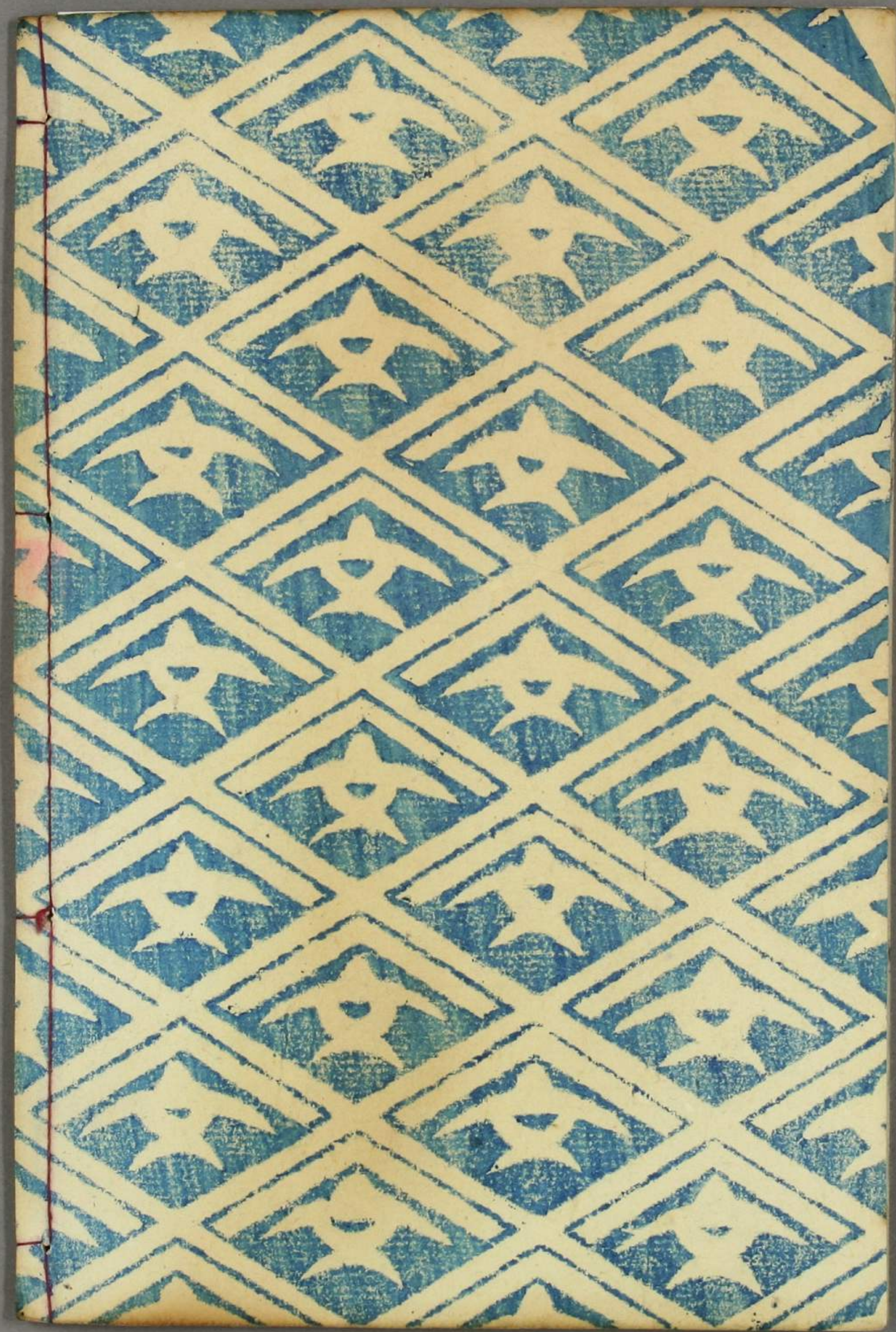
漆 寄 延 房 編輯
 近 世 紀 聞
 鮮 齋 永 濯 再
 初編より
 九編迄出版
 以下追々発売

漆 寄 延 房 編
 義 烈 回 天 百 首 全
 鮮 齋 永 濯 再
 魯文作
 國貞重

新 撰 西 野 古 海 編輯
 東 京 全 圖 全
 濡 衣 女 鳴 神
 秀賀作
 國貞重

文 地 本 錦 繪 問 屋
 出版 編輯 同人 助
 出版人 辻岡文助

出版 編輯 同人 助
 出版人 辻岡文助



夜嵐

おきり

花の

あゝ夢

芳門俊雄園

三編

園本勘造綴

永島の五の画

空松堂梓



14
2689
7-9